

舞いあがり!

大竹の神楽 受け継ぐ若者

10月8日、玖波祭の前夜。月明かりに照らされた大歳神社の境内では、鉦や太鼓が鳴り響き、3年ぶりの神楽舞が奉納されている。この日を待ちかねたように、大勢の人が舞台の前を埋め尽くした。

演じているのは、谷和神楽団。栗谷町谷和を本拠地としている歴史ある神楽団で、大人たちに交って中高生の団員が在籍しており、伝統芸能を受け継ぐべく研さんを積んでいる。激しい舞が魅力の近年の神楽は、若者の存在は大きな比重を占めているようだ。夜が更けてくるほどに、舞は激しさを増し、観客の拍手とともに最高潮に達していった。

【取材 企画財政課】



①竹あかりで飾られたランウェイ。浴衣のファッションショー。②知恩保育園の子どもたちが、けん玉の技を披露。③ポラントイアスタッフとして玖波中の生徒も参加。④素敵なハーモニーを聴かせてくれたデューオ「Smile」。⑤幻想的な光が漏れる竹あかり。



9/25
SUN

夏の忘れ物を探しに

玖波公民館

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、約1カ月延期となっていた「KUBAフェス」。夏の忘れ物を探しに、と銘打って開催されました。

第1部のステージが、知恩保育園年長組のけん玉の演技と踊りで幕を開けると、フォークダンスや詩吟、詩舞、3B体操などが繰り広げられます。第2部では、竹の筒に細工を施した手作りの『竹あかり』がランウェイを飾り、浴衣をまとった約100人の地元モデルの皆さんが、打ち上げ花火の映像をバックに次々と登場。ラストは谷和神楽団の『大江山』。激しい舞に拍手が湧きます。

観覧した田中雅子さん(栗谷町)は、「出演者の皆さんの表情が生き生きとしていました。コロナで出掛けられないお年寄りのためにも、こういう場も必要だと思いました」と話してくれました。

カメラステキ



PART1

踊って、走って、跳び越えて

にじいろこども園

真っ青に澄んだ空の下、にじいろこども園としての第1回目の運動会が開催されました。感染症対策のため、競技などは3歳未満児・年少・年中・年長に分かれての実施。

「お家の人までゴーゴーゴー!!」「あおむしくんへ!!ウーバーイーツ」「クップを倒せ!マリオパンダーズ」「はじめてのおつかい」「エルマーのぼうけん」などのユニークな競技名に負けない競走が繰り広げられました。子どもたちは泣いたり、転んだりしながらも、ダンスやかけっこ、リレーなどで、お父さん、お母さんに成長した姿を見せます。

運動会のトリを飾る年長組にとっては、保育所での最後の運動会です。種目終了後の子どもたちのあいさつに大きな拍手が送られました。



10/1
SAT



①ハードル越えて、クップを倒せ! ②ジャンプしてゴールを目指せ。③アイドルメドレーでダンス。④帽子がかわいい。「秘伝! ラーメンたいそう」⑤かっこいいぞ! きりん組のカラーガード隊。



(右) 衣装合わせの確認はしっかりと。(左) 舞の中心を担うように成長した中高生。右から岡くん、熊代くん、白石くん、高くん。(左下) 立ち合いの場面。息を合わせて稽古する。



谷和神楽団は現在17人で活動中。

「得意な役は無い」と照れ笑いの浴さんだが、鯛を釣りあげる恵比寿舞は絶品だと団長の久保さんは、太鼓判を押す。長い歴史を持つ神楽団だが、以前は旧舞という古くから伝わる舞を主としていた。しかし、近年は芸北地方で行われている派手な動きの舞やドラアイスなどを使った演出の新舞と呼ばれるエンターテインメント性の高い演目が人気を集めている。そうした演目をやりたいという団員の声もあり、10年ほど前に本場の安芸高田市の吉田神楽団の教えを乞うことになったという。

数カ月にわたり毎週のように通い、習得したのが『土蜘蛛(葛城山)』という演目。そこから徐々にレパートリーを増やしていき、以前からのものも含め、『戻り橋』や『大江山』など10演目ほどになったそうだ。

親子で共演

神楽を始めるきっかけは、人それぞれ。鬼の役どころを務めることの多い白石幸宏さん(岩国市)は、地元の神社で谷和神楽団を観て、「面白いなあ、自分もやったらうまくなるかな」と思って神楽団の扉をたたいたという。しかし「観るとやるのでは180度違った」と笑いながら振り返る。最初は楽と呼ばれる演奏から始め、舞デビューは『土蜘蛛』で源頼光を演じた。いわゆる正義のヒーローだ。こうしてキャリアを重ねてきた白石さんだが、「いまだにやりきった感はない」と、さらなる向上へ

親を始めるきっかけは、人それぞれ。鬼の役どころを務めることの多い白石幸宏さん(岩国市)は、地元の神社で谷和神楽団を観て、「面白いなあ、自分もやったらうまくなるかな」と思って神楽団の扉をたたいたという。しかし「観るとやるのでは180度違った」と笑いながら振り返る。最初は楽と呼ばれる演奏から始め、舞デビューは『土蜘蛛』で源頼光を演じた。いわゆる正義のヒーローだ。こうしてキャリアを重ねてきた白石さんだが、「いまだにやりきった感はない」と、さらなる向上へ

支える若いパワー

スピーディーかつエネルギー溢る演目の数々。それには若い演者のパワーが必要だ。7、8年前ごろから神楽団の存続と後継者育成を目的に、『子ども神楽』というジュニアチームを発足。玖波公民館で練習を重ねてきた。神楽の魅力にひかれ多くの子どもたちが参加してきた。そんな小学生だった子どもたちが成長し、中高生となり舞台上で華やかな舞を見せてくれている。

玖波小時代から始めた高校3年の岡佑樹さんと熊代太庸くんは「大江山」で、それぞれ酒呑童子の手下の茨木童子と唐熊童子という鬼の役をこなす。大勢の前で舞台を踏む経験で「内気な性格が治った」と話す岡くん。さらには「就職試験の面接で役立った」と神楽団での人間関係で培ったコミュニケーション能力が発揮できたようだ。ほかに「子ども神楽」から育った高虹輝くん(高一)



9月25日『KUBAフェス』の舞台上で暴れる酒呑童子(白石幸宏)を退治する渡辺綱(高虹輝 右)、源頼光(久保佑輔 中央)、坂田金時(白石光輝 左)

山里に響く神楽ばやし

標高440メートル。低い山々に囲まれた盆地に11軒が点在する集落、そこが栗谷町谷和だ。夜のとばりが下り、虫の声が聞こえてくるころ、集会所に神楽団の団員たちが三々五々集まってくる。集落の中心部あたりに位置する集会所は、かつては栗谷小学校谷和分校だったところ。閉校後は、集会所として住民のコミュニティの場となっている。そこが稽古場だ。

久しぶりの舞台は…

9月25日に玖波公民館で行われた『KUBAフェス』にゲスト出演。しかし久しぶりの本番で、満足な出来では無かったと皆が声を落とす。新型コロナウイルスのまん延で、練習ができない日々が続き、ようやく再開できたのは、

今年の5月のこと。練習不足だったことは否めない。「暑い日だったので、ぎりぎりまで衣装を着けずにいたら、順番に間に合わなかった」ともらす久保和実団長(玖波)。演目の『大江山』で敵役の酒呑童子らが、なかなか登場してこなかった不自然な場面は、そんな裏話があったからだ。

この日の練習では、そのときの反省から衣装の着付けの確認を念入りに行う姿があった。新しい舞に挑戦

新しい舞に挑戦

「神楽団ができたのは明治初期、おおかた150年になるんじゃないかの」。そう先代から聞いている長老の浴春雄さん(谷和)は、祖父から子へと四代にわたり神楽を舞ってきた一家だ。



楽の中でもとりわけ横笛の難易度が高い。



山に囲まれた静かな集落、谷和。そこが神楽の里。

子ども神楽の復活を

や、高校の弓道部の先輩に誘われて始めた岩脇苑子さん(和木町)、そして佐々木日和さん、中村優心さんら小方中2年コンビも、神楽団を支える若い力だ。

神楽団の兄貴的存在の久保佑輔さん(南栄)は、「進学や就職で去って行く人もいるけど、ぜひ続けていってほしい」。そう彼らに期待を寄せている。

コロナの影響で休止している『子ども神楽』。2年のブランクの間に辞めてしまった子もあり、残念そうな表情の久保さん。次世代を担ってもらうためにも、『子ども神楽』が復活できることを強く望んでいるようだった。



1 着々と準備 2 楽屋に荷物を運ぶ。3 天井に吊り下げるカラフルな御幣。洗濯バサミで装着。4 滑り止めと舞う範囲が分かる敷物を張る。5 広げたブルーシートが観客席になる。

10月8日、玖波祭の前夜に3年ぶりに奉納された神楽。団員たちは、谷和集会所から大歳神社まで衣装や小道具などを運び込み、昼間から舞台の設営に汗を流す。日頃は倉庫として使われている場所が、この夜の舞台となる。楽屋は倉庫裏の傾斜や段差のある狭い空間。ここで演者は入れ替わり立ち替わりの衣装替え。舞台前には、ブルーシートが敷かれ観客席となる。夕刻になると早々と席を取りに座布団を抱えた人がやって来る。宵闇が迫るとかがり火が焚かれ、神楽の始まりを待つ人で観客席が埋まっていく。

観客を前に演じることがモチベーションになる。

— 玖波祭前夜の舞台に立つ —

いで、盛り上げるのが楽しい」と話す。コミカルなアドリブも交えた腕が試される役どころだ。激しい立ち合いの演目の後は「恵比須舞」。こちらのもコミカルな場面がある。小道具の綱を針に付ける役は、中学生コンビが受け持った。

再び鬼たちが登場する「大江山」。「KUBAフェス」での失敗を見事に取り戻すことができたようだ。も更けて、いよいよ大がかりな「八岐大蛇」だ。オロチが舞台狭しと暴れ回るため、楽人たちは舞台脇から観客席に下りての演奏となる。谷和神楽団では、4頭のオロチが登場する。蛇腹になった胴体を体に巻き付け、とぐろを巻いたり、立ち上がったり、4頭が絡み合ったりと、動きも複雑。狭い視界でお互い息を合わせるの大変だ。おまけにクライマックスでは、口から火を噴く演出もある。狭い胴体の中から花火に着火するのは難しいと声をそろえる。やけどしたこともあると苦笑いするオロチ組の皆さん。大きな拍手が湧き、この日の神楽は無事終演。今や主力ともいえる花の高3コンビの

岡くんは「辞めたいと思ったことはありません。舞い終わって拍手をもらおうとうれしい」。そう顔をほころばせる。中学時代の同級生も観覧に来ており、「メイクをしているので最初は分からなかった」「イケメンだった」「かっこいい」と彼らの活躍を喜ぶ。「久々なので演者も乗ってみたい。観ているとアドレナリンが出るようです」と照永守さん（玖波）は笑った。コロナ禍で発表の場が失われ、加えて市内にある他の神楽団も高齢化による後継者不足で活動休止を余儀なくされたとも聞く。こうした生の舞台を観ることに比べて若い世代も興味を持つてくれる可能性もある。若い団員たちも観客の前で演じることがモチベーションとなり上達への道となるという。せりふ回しなど、まだまだ未熟なところ

団員募集 [初心者歓迎]

神楽団でかっこよく舞ってみませんか。
練習日 毎週土曜日 19時30分から2時間程度
練習場所 谷和集会所(栗谷町谷和) 玖波駅から車で約25分
問い合わせ 谷和神楽団(久保宅 ☎57-5706)



終演後、久保団長がお礼の言葉を述べる。全員の心地良い疲れと満足感ある表情がうかがえた。

神楽にとって重要な要素が楽の存在。演目によっては、舞い手と入れ替わり演奏する。大太鼓、小太鼓(締め太鼓)、手打ち鉦、笛のカルテットが基本形だ。楽譜は無く先輩の演奏を聴いて覚える、いわゆる耳コピだそう。大太鼓をたたく藤野俊光さん(岩国市)は、舞い手と息を合わせることを心掛けているという。「調子が乗ってくるとリズムが走ったりすることも」と苦笑する。

もあるが、若い世代の成長を見守っていくとともに、郷土芸能を守り育てるためには、工夫して発表の場を作っていくことも重要ではないだろうか。



1 『大江山』で鬼の館へ案内する紅葉姫。2 楽屋で出番を待つ鬼たちの首。3 観客席に飛び下りて威嚇する酒吞童子。4 舞い終わった後は水分補給が不可欠。5 オロチが立ち上がる見せ場。6 コンバット部隊ではありません。オロチを演じる人は迷彩色を着用。7 オロチの体から出てきた剣を手にした須佐之男命(スサノオノミコト)。8 『戻り橋』の楽を務めた左から中村さん、高中くん、佐々木さん、岩脇さん。

舞いおがれ!
大竹の神楽
受け継ぐ若者
煙を吐き出すオロチ。

